

〈埴原和郎教授退官記念〉

埴原和郎氏のこと

梅原 猛

『日本研究』の第八集の一部をあて、埴原和郎教授退官記念の論文を載せるといふ。埴原和郎氏の学問的業績については、埴原和郎氏に代わって、本センター教授に就任予定の尾本恵市氏が語ることになっている。また埴原和郎氏自らが「私版・日文研創世記」というエッセイを書き、日文研創設の秘話を語ることになっている。序文代わりに私も何か書けということになったが、私には自然人類学について何らかの学問的論文を書くほどの知識はもとよらない。それで、埴原氏のエッセイと重なる部分もあろうが、いささか思い出話を書いておきたい。

埴原和郎氏については二重の思い出がある。一つは私の日本古代に関する理論に関してであり、もう一つは国際日本文化研究センターの創設に関してである。この二つは分かち難く結びついている。一つを語るには他を語らなくてはならないが、一応ここでは分けて考えたい。

埴原氏に初めてお目にかかったのは、一九八一年十月の「天

城シンポジウム」においてであると埴原氏は語る。たぶんそうであろう。それは今から十一年前ということになるが、何かずつと前のような気がする。それはIBMの主催する、東京の江上波夫氏と中根千枝氏と京都の上山春平氏と私が幹事になった研究会であるが、一九八一年のシンポジウムは三回目であると記憶している。

私は、その前から一つの巨大な仮説を立てていた。日本の基層文化を縄文文化におき、その基層文化に以後の日本文化は深い影響を受けたという考えである。その縄文文化は一万二千年あるいは一万三千年の過去にさかのぼり、約一万年の間日本列島で栄えた。日本文化を考えるときに、このような約一万年続いた狩猟採集文化である縄文文化を考えねばならず、その文化の本質を知りたいと思った。哲学者の私が知りたいと思う縄文文化の本質というのは、縄文文化の哲学であり宗教であった。

このように縄文文化の本質を知りたいと思っていた私は、当

然アイヌ文化に着目せざるを得なかった。なぜなら、アイヌこそは悠久の過去からずっと最近まで日本列島に定住し、狩猟採集文化を続けている民族であるからである。アイヌは徳川時代まで蝦夷と呼ばれていたが、蝦夷は律令時代には東北地方で大和朝廷の支配を受けずに生活し、古墳時代には少なくとも日本の東半分が存在し、さらに弥生時代には日本全国に存在していた民族であることは確実である。とすれば、アイヌすなわち蝦夷は縄文の遺民ではないかということが自然に類推されるのである。

それではしばしば北海道へ、私の巨大な仮説をもって訪れたが、何度目かに藤村久和氏に会い、彼にアイヌの神についての論文を見せてもらった。すると、アイヌの神を呼ぶ名が五つあるが、それらは全く日本の古代語と共通なのである。特に「ラマト」という言葉がある。「ラマト」は「ヤツコラマト」とかいよいよに、宣命や祝詞のみで使われる言葉で、謎の言葉とされている。本居宣長は、ラ行の音で始まる言葉が上代にはないことを考え、この「ラマト」という言葉は、既に八世紀においてほとんど使われなくなった超古代語の名残ではないかと考えた。その場合、「ヤツコラマト」を「奴の魂」と考えればまことによく理解できる。とすれば、アイヌ語のなかに超古代語が残っていることになる。

アイヌは神を重んじる種族である。アイヌが伝える神事は、アイヌが古くから伝えてきたものにちがいない。ところがその

神を表わす名が全て日本の古代語で説明され、しかもそのなかには七、八世紀に既に使われなくなった超古代語が含まれているとしたならば、アイヌ語と日本語は同系統の言葉であるということになる。むしろアイヌ語は日本語よりはるかに基層日本語である縄文語の面影を残している言葉と考えざるを得ない。日本語は縄文語を根底としながら、土着の縄文人の使っていた言語が、渡来してきた弥生人によって、たとえば語頭にr音を使う言葉が発音できないので消失したように、音韻的に訛り、また文法的に変化した言葉ではないか。

つまり、縄文文化を日本の基層文化と考え、その縄文文化をもっとも忠実に伝えている文化がアイヌ文化であり、その次が沖縄文化であり、そして本州、四国、九州の文化はそれと弥生文化との混合によってできた文化ではないかというのが私の考え続けてきた仮説であるが、そういう見解は学界の常識とは全く相反するものであった。学界の常識によれば、日本文化とアイヌ文化は全く関係のない文化であるというのである。こういう常識となった見解は決して古いものではなく、徳川時代のアイヌ研究者は、アイヌ語のなかに日本の古語が多いことから、アイヌ文化は日本の古い文化を保存するものと考えていた。

しかし金田一京助はこの説を真っ向から否定し、アイヌ語は抱合語であり、膠着語である日本語と全く違うと考えた。そう考えると、おびただしいアイヌ語と日本語、特に日本古代語との共通語は、全て文化の高い日本語から文化の低いアイヌ語へ

と流入した言葉であるということになる。このようにアイヌ語が日本語と全く違う言語であるとすれば、金田一京助がなぜ苦勞してアイヌ語を勉強し、ユーカラを翻訳したか。それは、ただただ滅びつつあるアイヌ文化を日本民族として哀れに思い、保存してやるためなのである。そこにはアイヌの言語や文化を知ることによって、日本の文化や言語をより明らかに知ることができるという意味や、アイヌ文化から学び、現代文化を批判するという意味も全くないのである。

この金田一理論を支えていたのは児玉作左衛門の「アイヌ白人説」である。児玉作左衛門の理論によれば、アイヌは白人であり、日本人とは全く関係のない異民族であるという。こうして人類学的な「アイヌ白人説」という異民族理論が言語学的な異言語論である金田一理論を支え、また逆に金田一の異言語論が児玉の異民族論を支え、それが一つの学界の常識を形成していたのである。

この理論は明治の末年に形成されたが、それは明治三十七、八年戦争が終わり、高揚したナショナリズムの空気と無関係ではない。やはり日本人は、アイヌのような原始的と思われる民族と一緒にされてはかなわないのである。自己をアイヌや韓国と全く切り離された独自の大和民族と考えねば、とても欧米と対等な文明国の人間となり得ると思われなかったナショナリズムの思想の産物なのである。

私は、この金田一理論はどこかで柳田國男の転向とつながっ

ているかと思っている。金田一京助がアイヌ研究を志したのはもともと柳田國男の影響によるが、初めは山人の研究を志し、山人こそ日本の原住民であり、どこかでアイヌともあるいは未解放部落の人ともつながると考えていた柳田は、このような徐々に強くなるナショナリズムの気運の中で、自己を山人と一体化することをやめ、自己を常民、すなわち移住してきた弥生農耕民と一体化するという大きな思想的転向を行った。

私は、この転向は少なくとも心理的には幸徳事件と関係があるかと思っている。自己を山人と一体化する学問の道をたどっていくかぎり、柳田は幸徳秋水のような危険思想の道をたどり、やがて破滅を免れないと思ったのではないか。その転向の結果できたものが、あの稲作農業をする人間を日本人と考える常民民俗学の体系であるが、そこでアイヌはまさに日本人にあるまじきものとして切り捨てられたのである。そしてアイヌに代わって沖繩が柳田の認識の対象となり、日本本土と沖繩が弥生農耕によって結びつけられる。これが有名な柳田の「イネの道」の説であるが、伊波普猷は柳田とは反対に、イネは九州から南下してきたと考える。

私は、この柳田の北上説にせよ、伊波の南下説にせよ、弥生農耕でもって本土と沖繩を結びつける説であり、それは大変な誤謬を含んでいるのではないかと思った。なぜなら、沖繩で農耕が十分に行われるようになったのは鎌倉時代であり、しかも沖繩の島々は山が多く、珊瑚礁の地盤で水を貯めることが難し

く、あまり農耕に適していないのである。沖縄文化の基本は最近まで漁労採集にあった。あの琉球王朝という大変文化的に高度な王朝も、経済的には漁労の延長上にある貿易で得られた利潤を国力の基礎としていたように思われる。

この沖縄と本土を弥生農耕によって結びつける柳田や伊波の説は必然的に農耕をしていないアイヌの切り捨てになり、いっそうアイヌの異民族説を強化することになる。それゆえ、調べれば調べるほど、私が学問的認識の結論として間違いないと思われる説が学界の常識と矛盾せざるを得ないと感じた。

それで、自然人類学の理論として児玉作左衛門の説が正しいかどうかいろいろ調べているうちに、埴原和郎氏を中心とする自然人類学者のグループが児玉理論とは全く違う理論を既に提出していることを見出した。それでそのグループの一人のある学者に話を聞いたわけであるが、彼の説は明らかに私の考えと共通な部分が多いにもかかわらず、私と一緒にその説を追究することにあまり関心を示さなかった。おそらく、いつも学界の常識と全く反する異説を提供し、学界の孤児といわれる私と一緒に仕事をすることが自分の学問的生涯に決してプラスではないと判断されたのであろう。

それを中根千枝さんに話すと、埴原さんは違う、彼は自分の学説に忠実であり、自分の説をはっきり言う人であると言われた。それで「天城シンポジウム」によんだわけであるが、埴原氏ははつきり、アイヌは決して白人ではなく、縄文人の形質を

もっともよく受け継いでいる種族であり、その次に縄文人の形質を受け継いでいるのは沖縄の人であり、本土の人は、稲作農耕をもって弥生時代に渡来した弥生人の形質を多分にもった、縄文人と弥生人の混血の種族であると言われた。

実は、埴原氏は既に十年ほど前からそのような説を提出していたのである。しかしその説は多く英語で発表されていたために、あまり日本人に知られていなかった。それで、その理論を一般の日本人にも知らせてほしいということで、『日本人はどこからきたか』（小学館）という対談になったのである。

埴原氏は、実は日文研の共同研究でもその仮説を一貫して追究し、その仮説は国際的にもほぼ承認を得たように思われる。埴原氏の粘り強い追究と真理に対する実に率直な態度に深く敬意を表するものである。

ところがこの仮説の人文科学的裏付けについては、遺憾ながらいっこうに進んでいないのである。私は、自然科学においてそういう仮説がほぼ間違いないものとして証明された以上、人文科学においてもその仮説は成り立つと思う。たとえば言語学において、たとえば文化人類学において、たとえば民俗学においてそういう仮説は十分立証されると信じている。

しかしその仮説の立証はいっこうにはかどっていない。一つには、私自身の仕事がある後、あるいは国際日本文化研究センターの創設に追われ、あるいは新しい哲学の創造を志し、あるいは瓢箪から駒が出たようなスーパー歌舞伎の成功により文学

の創造を志し、いっこうにこの仮説に真剣に取り組む暇がないことが原因である。

私に代わって誰かがやってくればいいが、やってくれそうな人もなく、この仮説について強い関心を示す人も少ない。それは、日本の人文科学者は巨大な仮説の創造ということに不向きであることにもよる。日本の人文科学は主として移入学か、それとも伝誦学であり、新しい仮説を追究しようとする情熱に一生を捧げる人はまことに稀である。

学者たちはいつも学界の状況を日^ひ和^わ見^みし、どういう道を進めば自分が安全であるかということばかり考えている。そして移入学や伝誦学をやってもよいポストを得られ、尊敬をも得られるのである。それでそういう危ない新しい仮説の創造というようなことをしようとしない。それは好んで学界の孤児になろうとするようなものである。こういうことを考えると、埴原氏のように真理に対する強い感覚をもち、率直に自分の意見を言う人は稀なのである。

国際日本文化研究センターの創設についても、埴原氏はやはり功績者の一人である。このような研究所の必要性は前々から桑原武夫先生を中心に議論されたことであるが、それが具体的な案になったのは、京都市の「世界文化自由都市推進委員会」の提案の一つになり、創設のための予算が計上されたことに始まる。そしてそれとともに文部省学術国際局長をしておられた大崎仁氏のご配慮により、このような研究所の創設に関する研

究が文部省の科学研究費で認められてからである。

その研究会のメンバーを桑原先生とともに人選し、やはり埴原氏に入ってもらいたいということで、氏にメンバーの一員として加わっていただいた。この研究会は一月に一度、主に京都で、そして三度に一度は東京で開かれたが、メンバーは超多忙な人であるにもかかわらず、出席率は大変よかった。

この経過について多少埴原氏は語っておられるが、いずれまた詳しく語るときがあるろう。一つだけ話をすれば、私は、こんなに日本を代表するすぐれた学者たちが熱心な会合をもって下さった以上、何が何でもつくらなければならないと思っていた。そして必ずつくることができると信じていた。ところが、埴原氏をはじめ参加して下さったメンバーの多くは、必ずしもできるとは思っていないかったのである。たぶんできないであろうが、桑原先生と埴原がこんなに熱を入れるからには黙ってはいられないと参加していただいたわけであった。

後に創設が決まり、一宴を設けたとき、その席上で、「私はできるとは思っていなかった」と埴原氏が河合隼雄氏と異口同音に言われたのは私にとって大変ショックであった。埴原氏は東京の、河合氏は京都の私の右手と左手のように思っていた人たちである。その人たちが信じていなかったというのは、私にとって驚きであった。私は皆ができると思っているの、研究所ができなければ皆に申し訳ないと思ひ、頑張ったのである。しかし私と桑原先生以外の人はそれができるとはつきり信じ

てはいなかったらしい。それほどこのセンターの創設は困難極まるように思われたのであろう。しかしそういうことを私には一言も言われず、桑原先生と私がこんなに夢中になっているのだから、たとえ無駄であっても、労力を提供してもかまわないと思っておられた埴原氏や河合氏の友情がまことに嬉しかったのである。もちろん日文研の創設にはいろいろ苦勞もあるが、その苦勞は結構楽しかった。私は、この国際日本文化研究センターが日本のためにも世界のためにも必要だと考えた。そういう目標を立てると、後のことは一切目に入らないのが私のもって生まれた性格である。

一つのを建てるには、強い情熱と、いつも冷めた目で状況を眺め、状況に応じた的確な対処が必要である。それは学者としてはめったにできない仕事である。あるいは実業家などはいつも行っていることかもしれないが、私にとっては、自分が戦国の群雄の一人になったかのような気分を味わうことのできる貴重な経験であった。私は、日文研創設にあたって、ご援助をいただいた多くの人々に心から感謝するとともに、それは学者としての私にとって必ずしも損失ではないと考えている。私はそのなかで生きた人間を実践的に認識することができたのである。

私は桑原先生と相談して、このセンターは人文科学、社会科学の学者ばかりではなく、自然科学の学者が四分の一は必要だと考え、最初から埴原氏をメンバーの一人として予定していた

が、氏が日文研にくることを決断したのは、酒席での私の行動がきっかけであるという。それは祇園のお茶屋でのことであるが、酒がまわって埴原氏と意気投合し、間にいた芸者を突き飛ばして埴原氏に抱きついたというのである。私のほうは全く覚えていないが、埴原氏は後々まで語り種にして、梅原に抱きつかれて私の運命は変わったと言われるのである。

もう一つ、埴原氏に総務担当の研究調整主幹を頼んだときのことである。総務の研究調整主幹はいわばナンバーツーである。この主幹を四年間やっていただいたが、初めの年はまだ東大と兼任で、一週間に一度、東京から京都に来て、二、三日滞在していただけではない。それは明らかに過酷な勤務である。私は、過酷であることを重々知っていたが、埴原氏に同情しなかった。中根千枝さんが見るに見かねて、一週間に一度ではなく二週間に一度の勤務にすればどうかと私に忠告したが、私はそれを埴原氏にも誰にも語らなかった。

ナンバーツーの地位にいる教官はそれだけの過酷な勤務に耐えなければならぬ。私は中根さんの忠告を無視したが、埴原氏は一言も愚痴を言わずにその過酷な勤務に耐えて下さった。そしてそれが国際日本文化研究センターの評価を高め、今日のような研究所として完成することができたのである。

埴原先生、本当にありがとうございました。